

『星の子』(今村夏子)

吉田 梨紗



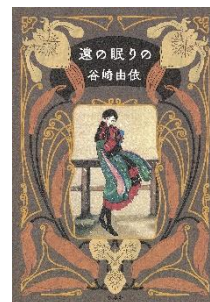
主人公のちひろは子供の頃体が弱く、それを心配した両親がなんとか治そうとして知人に紹介された水「金星のめぐみ」に頼ります。そこから新興宗教まがいのものにはまっています。ちひろの普段の生活の中で出てくる、宗教を信じて疑わない怪しげな行動をとる両親たち(本人たちはいたって大真面目)が物語に奇妙な雰囲気醸し出します。

宗教によってちひろの周りの人間関係に変化がでてきます。ちひろは宗教を半分信じているような、信じていないような、これから先どのようになってゆくのか想像するのも楽しいと思います。読みやすくそこまで長くないお話なので読書初心者の方にもオススメです。(朝日新聞出版)

『遠の眠りの』(谷崎由依)

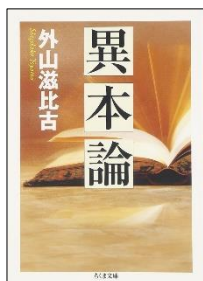
原 真由美

大正時代末、福井郊外の村で生まれた貧しい農家の娘絵子は、本が好きでたまりません。学問を志すことが男子にしか許されなかった時代、本を読み考えるための言葉を獲得したいと望みます。やがて窮屈な家から逃れ町へ出て人絹工場の女工となり、その後、福井に初めて開店した百貨店に魅了され、併設された少女歌劇団の脚本家となります。農村は疲弊し、工場には労働争議が生じる一方、都市には華やかな文化が開いた時代でした。労働運動に身を投じる女工仲間、10代で嫁がされた姉や妹たち、因習から逃れたいという身近な女性たちの声を絵子は脚本に投影します。忍び寄る不吉な足音に「この戦争が終わるまで、生き延びて、逃げ切りましょう」と仲間を励ました。日本海に面しユーラシア大陸に向かって開かれた港町であった福井という地方都市を舞台に、自由を夢見て生きた女性達の物語です。(集英社)



『異本論』(外山滋比古)

大久保美玲



大学時代、著者である外山先生の授業を1年間受けたことがあります。ユーモアあふれる軽やかな語り口の講義は非常にわかりやすく、先生が考えられている難しいこともスルスル理解できたような気持ちになりました。その時のテキストがこの『異本論』。本書は、読書のおもしろさは「読者の自由な見方」が深く関わっていると指摘します。一般的によしとされる「作者、作品中心の読み方」は読者の感受性を拘束し、とたんにおもしろさをかき消してしまうのです。そして読者の自由な読み方が沢山の異本を生み出し、淘汰され、残ったものが古典となると先生は考えます。その代表的なものが「むかしばなし」です。先生は残念ながら今年の7月に96歳で亡くなりました。しかし、先生の希有な思考方法は多くの著書として残り、今でも読者を刺激し続けてくれます。(ちくま文庫)